

非情報系女子短大におけるインターネット環境

6S-5

尚綱女学院短期大学
一般教育 木村 清*

1. はじめに

インターネットに接続した学内ネットワークの構築と運用についてはすでに多くの大学で報告されている¹⁾。本報告で、表題に「非情報系短大……」とつけたのは、情報系学科を持たず、また情報系の専任教員がほとんどいない、本学のような女子短大での模索というものを示したかったからである。

なお、本学の規模は生活科学(食物栄養・生活科学専攻)、保育、英文、人間関係の4学科、と専攻科(食物・保育・生活科学専攻)合計で学生数約1860名、専任教員数58名である。

2. 「環境」の構築にあたって

単に、実習室を整備し、コンピュータ実習科目を設置したところで、それは教育(学生にとってはキャンパス生活の)現場でコンピュータを利用していることにはならないだろう。

コンピュータリテラシー/ネットリテラシーの涵養には、・語学と同様、自発的に使う(使わざるをえない)「環境」が必須であり、情報処理関連科目以外でのコンピュータの実践的利活用の推進も視野に入れる必要があるだろう。

したがって、ここでいう「環境」とは、ネットワーク関連設備のようなハードウェア面のみならず、カリキュラム、実習室の運用、アカウント付与方針等のソフトウェア面、スタッフのサポートなどといった人的要素さらには教員・学生の意識といった心情的な面も含めたものである。

そしてまた、この「環境」は現在ではもはや一部の授業科目、学科といったローカルなものではなく、全学的な(全世界的なと言ってもよい)学生・教員共有の環境ととらえる必要があるだろう。

こうしてこの「環境」に学生・教員が同じように関わることによって、

- ・能動的理解の機会
- ・学生あるいは教員同士の相互啓発によるコミュニケーション
- ・学生・教員間のコミュニケーションの促進といった副次的教育効果も期待できる。

さて、本学におけるこれまでのネットワーク環境に関する取り組みの要点は以下のようなものである

が、若干の説明を後節で行いたい。

ハードウェア環境

- ・実習室以外にも全研究室、一般教室にも情報コンセントを設置、インターネット接続

ソフトウェア(運用)環境

- ・コンピュータ実習室の開放
- ・ライセンス数無制限のメールソフト、教員アドレス帳提供
- ・情報処理関連科目履修者以外にも希望者にメールアドレス交付。
- ・アシスタントによる授業、学生、教職員のサポート
- ・学内専用 Web による情報提供

3. スタッフ

本学では学内ネットワークは教授会組織である「情報システム委員会」が基本的な運用を議論し、実働組織として、職員を含む「運用部」を置いている。

本学のような短大では、特に

- 1) ネットワーク管理
- 2) 学生・教職員に対する各種支援・相談その他の事務

を実際に担当する教員、事務員の確保が非常に難しいのが実態である。

また、特にコンピュータ実習室を授業履修者以外の学生にも開放している場合には、自習学生の支援は授業担当者だけでは手に負えないという問題がある。しかも大学院生の T. A. (Teaching Assistant) も期待できない。一方で、学生のみならず個々の研究者(教員)の情報化の支援も考慮しなくてはならない。

そこで実際には、1)については一部を外部業者へ委託し、2)については臨時職員(アシスタント)を採用し、その任にあたってもらう体制としている。

実習室の現状、たとえば教員が出すレポートを実習室で仕上げるというスタイルが多くなっている現状では、アシスタントの存在というものがますます重要になってきている。

4. 実習室の開放

全学共通のコンピュータ実習室は、

* Internet Environment in Junior College
without Computer Oriented Course
Kiyoshi Kimura, Shokei Women's Junior College

Windows95:36 台×2 室、Mac:30 台×1 室で、端末はすべてネットワークに接続されている。

これらの実習室は授業利用時を除き自習用として開放しており、図書館のように全学生が自由に利用できる。開放時には 2 名のアシスタントが適宜巡回し、学生の相談、機器のトラブルなどに対応している。

一方で実習室の授業利用も増えてきており、今年度前期は 1 週 5 日、1 日 5 コマ、3 室合計 75 コマのうち 29 コマが授業利用で、のこりが自習利用という状況である。

5. 電子メール

学内のインターネット環境を考える場合、学生の電子メール利用をどうするかというのがもっとも大きな問題となる。ここではメールソフトとその運用上について述べる。

メールソフトについては理工系の学生なら直接 UNIX ホストにログインして mail コマンドなどでメールのやりとりをすることも考えられるが、これは本学の学生にとっては荷が重い。

したがって、Windows 上のメールソフトを利用せざるをえない。しかし 1 台の端末を不特定多数の学生が利用する状況を想定したメールソフトはほとんど見当たらないのが現状である。

その中で、昨年度は、メールプログラム自身コンパクトで 1 枚のフロッピーディスクに格納できるフリーソフト^[1]を使用していた。

ところが起動に時間がかかる、ディスクがすぐにいっぱいになる、本学の学生にとっては使いにくい等の不都合があった。

ところで、メールプログラムをハードディスクに置くとすると、マルチユーザ対応のメールソフトが必要となる。

この場合、メールソフトのアカウント情報がどこに保持されるかは、本学のような環境では重要な問題である。

個々の端末にアカウント情報が保存されると、学生はいつも決まった端末でないとメールのやり取りができないばかりか、学生の異動に伴う管理が困難となる。ネットワーク上に置く場合でも管理上の手間が問題となる。

したがって、プログラム自体は端末のハードディスクに置き、個人アカウント情報やメールなどの個人情報はずべてフロッピーディスクに置いて運用できるメールソフトが望ましい。

昨年度よりこのような条件を満たすものを探していたところ、シェアウェアソフトでこの考え方に近いもの^[2]があったため、上記の内容を作者に提案し、対応してもらうことができた。今年度は実習室の Windows95 パソコンすべてにこのメールソフトをインストールして使用している。

参考までに、

- ・設定情報のひな型と教員のアドレスリストのテキストファイルをサーバーに用意しておく
- ・学生のメール用フロッピーディスクにそれらのファイルをコピーする
- ・その後メールソフトを起動しアカウント情報のユーザ名、パスワード、本名部分だけを書き換える

というような簡明なステップで、個人のメール用フロッピーの初期設定が完了するようにしている。

6. 学生のメール利用について

コンピュータ実習関連授業以外でも、英文科 1 年生全員、食物栄養専攻 1 年生全員というように、科、専攻単位で授業とは関係なしにメールをつかわせる科・専攻が出てきたのが今年度の特徴である。

また、学生自身(テレビドラマの影響か)メールに対する関心は非常に強く、関連授業を履修していない学生にもメールの希望が多い。これに対しては、基本的なマナーやリスクについての指導が大切だが、現状ではアシスタントによる、初期教育、誓約書の提出を求めることなどで対応している。

7. 現状と課題

最近のパソコンブーム、テレビドラマなどを反映している要因もあろうが、学生は昨年度(ネットワーク導入初年度)と比較して非常に積極的になってきており、土曜日も含めた実習室開放時間の延長を望む声も聞かれるようになった。自習利用中のアシスタントの支援、学生同士のいわゆる口コミの効果というものも大きいと実感している。学生のみならず教員の意識もこの 1 年で大きく変化している。

しかし多くの大学と同様、本学においても学生の利用のマナー、ネチケットといった問題も浮上しつつある。女子短大という性格上、幸いにしてシステムに障害を与えるような行為は見当たらないが、プリンタの過度の使用、いわゆる「はまり」現象、インターネット上での金銭的、精神的被害などが懸案事項となっている。

教員側としては(関連科目担当者でなくとも)、学生たちは Web サイトやメールといったこれまで教育の現場には存在しなかったタイプのメディアにキャンパスの中で日常的に接するようになってきたということを現実のものとしてとらえなくてはならないだろう。

[1] たとえば平成 8 年度情報処理教育研究会講演論文集など

[2] <http://www.threeweb.ad.jp/~ishioka/>

[3] <http://maple.cup.com/>